新月祭（および祖霊祭）の原初形態
―Ṛgveda X 85と Atharvaveda Ⅷ 10を中心に―

阪本（後藤）純子

0. 死亡した父祖を祭る祖霊祭と，月の満ち欠けに合わせて行う新月満月祭とは，世界の多くの民族に共通する非常に古い宗教儀礼である。整備されたヴェーダ祭式体系では，新月祭，満月祭，祖霊祭のいずれも供物として Soma（麻黄の搾汁）を用いないが，リグヴェーダには新月祭と祖霊祭における Soma の圧搾献供が述べらる。本稿では，新月祭に重点を置きその原初形態を探りたい。

1. 自然周期と祭式（cf. Sakamoto 2010, 2012, 阪本2006, 2015 56f.）[1]

1.1. 古代インド思想の基本には，「宇宙のすべての現象（天文，気象，生物の活動・生殖・生死など）は，それぞれ固有の周期に従い，循環運動する」という考え方が見られる。*ṛtá-* は「諸現象が各自の周期, 法則, 秩序にぴったり合っていること」から「宇宙の周期的法則性」,「天理」の意味へと発展し，初期ヴェー

1　ヴェーダ暦は朔望月と太陽年を組み合わせた太陽太陰暦である。注意点は，1）1日の開始が日没である。祭式の日は「～の夜」（f. *rātrī́-*/*rātrí-*）と表現されるが，これは日没から次の日没までを指す。例えば「朔の夜」*amāvāsyā̀-* は，朔の夜の日没から，昼を経て，次の日没までを意味する。― 2）暦の指標となる *nákṣatra-*「月宿」（月の軌道［白道］上の28~27星座）が，B.C.2300 頃の恒星と太陽の位置関係に基づいている。例えば，月宿の筆頭に位置する *kṛ́ttikās* f. pl.「昴」は当時の春分点にあり，満月がそこに宿る Kārttika 月は秋分月であった。*aghā́s*/*maghā́s* f.pl.「獅子座頭部（レグルスなど）」は当時の夏至点にあり，満月が宿る Māgha 月は冬至月であった（→２.２.）。黄道歳差により恒星と太陽との位置関係は，B.C. 9 世紀には約20日，B.C. 2 世紀には約30日ずれる。従って，ヴェーダ期後半には，実際の秋分月は「Āśvina 月」（Kārttika 月は翌月）に，冬至月は Pauṣya 月（Māgha 月は翌月）になる。Ekāṣṭakā（Māgha 月の黒半月８日）も，本来は冬至の１週間後であるが，B.C. 9 世紀には，冬至後１ヶ月（±15日：現行暦の１月下旬から２月上旬）となり，Pauṣya 月 Aṣṭakā（黒半月８日）が冬至に近づく（→ 注11, 14, 17, 18）。ヴェーダ祭式は理念としてB.C.2300頃に遡る「旧暦」に依拠するが，時代とともに現実の暦に順応した規定が追加され，複雑な様相を示す。― 3）年の変わり目は，本来は秋分に，後に冬至に置かれたと推測される。12の朔望月と太陽年との差である約11日は「第13月」「閏月（*upamāsa-*）」として重要な役割を果たす（→ 2.3., 注23)。

ダ文献では最も重要な概念の一つとなる。同じ語根から派生した *ṛtú-* は「諸現象の持つ固有の周期」特に「季節」と「排卵（受胎）周期」（非受精卵の排出による出血が「月経」）を意味する。この自然周期に対応して，人間の社会活動（牧畜・農耕，移動・定住，祭式など）が営まれる。

朔には，地球から見て月が太陽と同一方向にあり，不可視となる；望には，月は太陽と正反対の方向にあり，満月となる。月の朔望周期（平均約29.5日）と人の排卵（受胎）周期（平均28～30日）がほぼ一致することから，月が天から消滅する朔の夜は，月と人（祖霊を含む）の「死と再生」を象徴する「聖夜」として，欲望を抑制して祭火のもとで過ごす（Upavasatha の原義）。先行する午後に祖霊祭 Piṇḍapitṛyajña（家庭祭では Śrāddha）が，翌朝に新月祭 Darśa が挙行される。満月の夜も「完全な繁栄」を象徴する（cf. AV VII 80,1–4）「聖夜」として Upavasatha を行うが，先行する午後の祖霊祭を欠く；翌朝に満月祭 Pūrṇamāsa を挙行する。朔・新月と死者との関係については後述 AV VII 81, 5 参照。

月の出は太陽より毎日平均約50分ずつ遅れる。朔の前には有明の月が日の出直前に東に現れ，朔に月は太陽と合一し，その後，新月が日没直後に西に現れる。月は満ち欠けしながら白道上を進み，毎夜異なる星（*nákṣatra-*「月宿」，RV では太陽も含む）に宿る。太陽・恒星に対する月の位置（「月宿」）と形状が日・月・季節・年を区別する（分け定める：*vi-dhā*）目印であり，暦の基準となる。追いつ追われつ合体と離合を繰り返す月と太陽の相関運動が RV 第10巻に歌われている。

RV X 55,5［Indra 讃歌］= AV IX 10,9（cf. ŚB I 6,4,18–20 Indra［太陽］が Vṛtra［月］を飲み込む）

vidhúṃ dadrāṇáṃ sámane bahūnā́ṃ ¦ *yúvānaṃ sántam palitó jagāra* |
devásya paśya kā́v$_{i}$*yam mahitvā́-* ¦ $_{a}$*dyā́ mamā́ra sá hiyáḥ sám āna* ‖

多くの［星たち］の集まりの中を走っている，［星たちを月宿に］分かち定める者（*vidhú-*: 月）を，まだ若いのに［その者を］，白髪の老人（太陽＝Indra）が飲み込んだ。見よ，神（Indra）の見者たる能力を（*kā́v*$_{i}$*yam*），偉大さたちを（*mahitvā́*）。今日，彼（月）は死んだ。彼は，昨日，［太陽と］一緒に呼吸していた。

RV X 85,18–19［婚姻の歌（→ **2.4.**）］= AV Ⅶ 81,1–2［新月 Darśa 讃歌］

18. *pūrvāpáraṃ carato māyáyaitáu* ¦ *śiśū krī́ḍantau pári yāto adhvarám* |
víśvāniy anyó bhúvanābhicáṣṭa ¦ *ṛtū́m̐r anyó vidádhaj jāyate púnaḥ* ‖

先になり後になり，これら両者は計算測量能力（*māyā́-*；→1.4. AV VIII 10,22）により動く。遊び戯れている二人の幼児たち（太陽と月）は（祭式の）行程（*adhvará-*）を巡り進む。あらゆる存在を一方（太陽）は見つめている，他の一方（月）は自然周期たち（*ṛtú-* pl.）を分け定めつつ（*vidádhat*），再び生まれる[2]。

19. *návo-navo bhavati jā́yamānó-* ¦ ${}_{a}$*hnāṃ ketúr uṣásām et*${}_{i}$*y ágram* |
bhāgáṃ devébhyo ví dadhātiy āyán | *prá candrámās tirate dīrghám ā́yuḥ* ‖

［月は］生まれつつ，その度に新しくなる。日々を区別する目印として，曙たちの先頭を行く（朔直前に夜明け前に現れる)。［新月は地上に］来たりつつ，分け前を神々に分け定める（*ví dadhāti*)。輝く月は［人間たちに］長い寿命を越え渡らせる。

AV VII 81 は上記２詩節に続き，新月の増大と死者の気息との関係（cf. 阪本 2015 26f.)，さらに Soma（月）すなわち神々の食物との関係（→ **3. 1.**）を述べる：

5．*yò '*${}_{a}$*smā́n dvéṣṭi yám vayám d*${}_{u}$*viṣmas* ¦ *tásya t*${}_{u}$*váṃ prāṇén*${}_{a}$ *ā́ p*${}_{i}$*yāyasva* |
ā́ vayám pyāsiṣīmahi góbhir áśvaiḥ ¦ *prajáyā paśúbhir gṛháir dhánena* ‖

我々を憎んでいる者，我々が憎んでいる者，その者の気息により君（新月 *darśá-*）は膨らめ。牛たちとともに，馬たちとともに，子孫とともに，家畜たちとともに，家たちとともに，財とともに，我々は膨らみたい。

6．*yáṃ devā́ aṃśúm āp*${}_{i}$*yāyáyanti* ¦ *yám ákṣitam ákṣitā bhakṣáyanti* |
ténāsmā́n índro váruṇo bṛhaspatir ¦ *ā́ p*${}_{i}$*yāyantu bhúvanasya gopā́ḥ* ‖

神々が膨らませる，あの（天にある）Soma の茎（= 月)，不滅の者たちが食べる不滅のもの（= 月)，それにより我々を，Indra は，Varuṇa は，

2　RV I 164,20［謎の歌］の「一対の鳥」は「太陽と月」と同時に「Puruṣa と Virāj（→**1.4.**)」を指す。

Bṛhaspati は膨らませよ，存在の守護者たちは。

1.2. 新月満月祭はシュラウタ祭式の基本形である。主要献供は（新月祭では Agni と Indra［＝太陽］への, 満月祭では Agni と Soma［＝月］への）パンケーキ Puroḍāśa であるが，より古いタイプの新月祭では Sāṃnāyya（酸乳と加熱生乳との混合）を Soma（麻黄の搾汁）に見立てて Indra（＝太陽）に献供する[3]（→ 4, 注24, 注25）。家庭祭の新月満月祭では粥を献供する。祖霊祭は挙行する時（毎月の朔，特定月の満月，冬至前後の黒半月8日など）により性格も供物も相違する（別稿にて論じる）。祖霊祭と Soma の関係については後述 **3.** 参照。

1.3. 朔望毎の献供への最古の言及は **RV I 94,4**（Agni 讃歌）と思われる：

bhárāmedhmáṃ kr̥ṇávāmā havı̄́ṃṣi te ¦ *citáyantaḥ párvaṇā-parvaṇā vayám* |
jīvā́tave pratarám̐ sādhayā dhíyó ¦ *'ágne sakhyé mā́ riṣāmā vayám̐ táva* ‖

我々は焚き木を持って来よう。供物達を君に作ろう，注意深く，節目（朔望）毎に（*párvaṇā-parvaṇā*），我々は。更に生きるために，［我々の］思慮達を成就させよ。Agni よ，君との仲間関係に関して，我々が傷つくことがないように。

1.4. 年・月・半月・日（夕朝）毎の祭式の起源が **AV VIII 10**（Virāj 讃歌）に説かれる。Virāj は「(原初の）男」Puruṣa から生まれ，更に Puruṣa「男」を生む女性存在であるが[4]，精神原理である Puruṣa に対し，物質原理として生命

3　Cf. 西村2006 40, 43ff., 139「結論としては，元来，新月祭では Indra に対する sāṃnāyya が，満月祭では **Agni** に対する puroḍāśa が，主要な献供として位置づけられていたものと推測される」。筆者は，本来，新月祭では太陽神 Indra へ Sāṃnāyya が，満月祭では**月神 Soma** へ Puroḍāśa が献供され，Agni への Puroḍāśa 献供は両祭を統合する共通項であると推測する（cf. Cāturmāsya 祭の Parvan 共通献供）。下記1.3. RV I 94,4 は朔望毎，すなわち新月祭と満月祭での Agni への献供を明示する。

4　RV X 90［Puruṣa 讃歌］を下敷きにしている：2. *púruṣa evédáṃ sárvaṃ* ¦ *yád bhūtáṃ yác ca bhávⁱyam* | *utā́mr̥tatvasyéśāno* ¦ *yád ánnenātiróhati* ‖「Puruṣa だけが，生じたものと，（将来）生じるべきものと，この［世界］すべてを支配している。かつまた不死性を支配している，食物により［死を］越えて成長する時。」5. *tásmād virā́j ajāyata* ¦ *virā́jo ádhi púruṣaḥ* | *sá jāté áty aricyata* ¦ *paścā́d bhū́mim átho puráḥ* ‖「彼（Puruṣa「男」）から Virāj が生まれた。Virāj からは Puruṣa が。彼は生まれるや地に余った，後方でも，それから前方でも。」

力の源泉となり，宇宙を循環しつつ，万物に入り，活性化する（Sāṅkyha 哲学二元論の男性原理 Puruṣa :: 女性原理 Prakṛti の基となる；注２参照)。先行する Virāj 讃歌 AV Ⅷ 9と同様に , Ⅷ10でも , Virāj は全世界を自由に歩き回る雌牛（乳牛）として描かれる。

［**Paryāya I**］［Virāj の誕生と歩み[5]；三祭火と三集会場］

１. *virā́ḍ vā́ idám ágra āsīt. tásyā jātā́yāḥ sárvam abibhed iyám evédáṃ bhaviṣyátī́ti.* ‖

Virāj が太初においてこの［世界］を支配していたのだ。彼女が生まれると，この（世界の）すべてが彼女を恐れた，「他ならぬこの者がこの（世界）を支配するだろう（*idáṃ bhaviṣyáti*）[6]」と。

5 「Virāj の歩み」は特殊な発展を遂げる：1）MS^{p} Ⅰ6,11:103−104,1［Ādhāna］*trír vā́ idáṁ virā́ḍ vyàkramata gā́rhapatyam ā́havanīyaṁ sábhyaṃ. tád virā́jam āpad. ánnaṁ vái virā́ḍ. ánnaṁ vā́vaitád āpat.*「３回，これ（ここにある祭火）に Virāj は，別れ歩んだのだ（Impf.），Gārhapatya と Āhavanīya と Sabhya とに。［祭主は］そのようにして Virāj を（たった今）獲得した（Aor.）。Virāj は食物なのだ。このようにして［祭主は］実に食物を獲得したことになる（Aor.)。」；2）KS^{p} Ⅵ 8:57,13−15［Agnihotra］*odanapacano gārhapatya āhavanīyo madhyādhidevanam āmantraṇam eṣā vai virāṭ pañcapadā. tām evāpnoti. tām avarundhe. yasya hy eṣāvaruddhā sa manuṣyāṇāṁ śreṣṭho bhavati.*「Odanapacana（粥を煮る火 = Dakṣināgni), Gārhapatya, Āhavanīya, 賭博盤の中央，会議場，これらが「五歩を持つ（５つの足から成る）Virāj」である。他ならぬそれを獲得する。それを我が物として囲い込む。これ（Virāj）がある者により囲い込まれたならば，その者は人間たちの中で最も優れた者となるから。」；3）TB Ⅰ1,10［Agnyādheya］では５祭火（G 火，Ā 火，Anvāhāryapacana［Dakṣiṇāgni の別名］, Sabhya「sabhā（→注８）の火」, Āvasathya「客人の宿舎（Āvasatha）の火」）への「Virāj の歩み」（Virāṭ-krama, Virāja-krama）が，旅の前後の Agnyupasthāna のマントラと結合され，祭火設置祭の中に組み込まれる。これが Janaka 王の五火説の基盤となったと推測される，Sakamoto 2001 157−167参照。五火説に関しては注25末を参照。

6 いわゆる「*idam-bhū/as* 構文」である。動詞 *bhū* または *as* と（通例は中性）名詞単数対格（acc.sg.）との組み合わせで「～を司る、管轄・支配している（*as*）/ するようになる（*bhū*)」を意味する（動詞が略されることもある）。この構文は K. Hoffmann（1976 557–559）に指摘され、後藤敏文により解明された（2007 805–809, 特に 807f., Gotō 2008)。

２．*sód akrāmat. sā́ gā́rhapatye ny àkrāmat.* | *gr̥hamedhī́ gr̥hápatir bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は Gārhapatya「家長に属する祭火」の中に歩み入った。このように知っているならば，［その者は］家庭祭式により特徴づけられた家長となる。

３．*sód akrāmat sā́havanī́ye ny àkrāmat.* | *yánty asya devā́ deváhūtiṃ. priyó devā́nāṃ bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は Āhavanīya「（そこに）献供されるべき祭火」の中に歩み入った。このように知っているならば，その者の神々への呼びかけに神々は行く，［その者は］神々の一員（/ 愛しい者 *priyá-*）となる。

４．*sód akrāmat. sā́ dakṣiṇāgnáu ny àkrāmat.* | *yajñárto dakṣiṇī́yo vā́sateyo bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は Dakṣiṇāgni「南にある祭火」の中に歩み入った。このように知っているならば，［その者は］祭式に適い，報酬（を与える／受け取る）に値する，宿泊させる／する資格のある者となる[7]。

５．*sód akrāmat. sā́ sabhā́yāṃ ny àkrāmat.* | *yánty asya sabhā́ṃ sábhyo bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は社交場（*sabhā́-*）[8] の中に歩み入った。このように

7　*dakṣiṇāgni-* を *dakṣiṇa-*「南（にある）」と *dakṣiṇā-*「祭官報酬」との掛詞により説明する（cf. AV XVIII 4,8）。当該文では，主語が，祭主として祭官に報酬を与え（自宅に）宿泊させるのか，祭官として報酬を受け取り（祭主のもとに）宿泊するのか，二義的である。

8　詩節６・７は５の形式的置換である。*sabhā́-*，*sámiti-*，*āmántraṇa-* はいずれも集会所（小屋）であるが，*sabhā́-* は賭博場と（祭）火（*sábhya-*）を備えた客人接待の場，*sámiti-* は部族（村落）共同体が軍事・政治・経済活動に関わる集会をする場，*āmántraṇa-* は首長（王）がバラモンや王族たちを召喚し助言を受ける場（宿泊所を兼ねる）と解釈した。より古い段階では，部族の精神的指導者である大バラモンの *sabhā́-* が，これらすべての機能を果たしていた可能性がある。*sabhā́-* と *sámiti-* に関する用例は，Rau 55–57 および 82 参照。*āmántraṇa-* は，パラレル KS VI 8:57,13–15（→ 注５）にも現れ，Taittirīya 派の Āvasatha の火（Āvasathya）に対応する。

知っているならば，この者の社交場へと［人々］は行く，［その者は］社交場にふさわしい者（*sábhya-*）となる。

6. *sód akrāmat. sā́ sámitau ny àkrāmat.* | *yánty asya sámitiṃ sāmityó bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は集会場（*sámiti-* → 注８）の中に歩み入った。このように知っているならば，この者の集会場へと［人々］は行く，［その者は］集会場にふさわしい者（*sāmityá-*）となる。

7. *sód akrāmat. sā́mántraṇe ny àkrāmat.* | *yánty asyāmántraṇam āmantraṇī́yo bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は会議場（*āmántraṇa-* → 注８）の中に歩み入った。このように知っているならば，この者の会議場へと［人々］は行く，［その者は］会議場にふさわしい者（*āmantraṇī́ya-*）となる。

［**Paryāya II**］［中空に留まった Virāj を，仔牛 Indra と韻律 Gāyatrī と諸サーマンにより神々が搾乳し，植物たち，広がり，水たち，祭式を搾り出す[9]］

8. *sód akrāmat. sā́ntárikṣe caturdhā́ víkrāntātiṣṭhat.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は中空において，４重に分かれ歩んだ（闊歩した）状態で，留まった。

9. *tā́ṃ devamanuṣyā̀ abruvann. iyám evá tád veda yád ubháya upajī́vememā́m úpa hvayāmahā íti.* ‖
彼女について神々と人々とは言った，「この者だけがそれを知っている，我々双方がそれを糧として生きることができるものを。この者を我々は近くに呼び寄せよう」と。

9　Jaiminīya-Brāhmaṇa I 45f., Bṛhat-Āraṇyaka-Upaniṣad（M VI 1; K VI 2）, Chāndgya-Upaniṣad V 4,1–9,2 の五火説，すなわち「神々が水たちまたは信を献供することによりソーマ，雨，食物，精液が順次生じ，最後に男（人 *púruṣa-*）が発生する理論」との関連が注目される（→ 注25）。Cf. 阪本 2015 35–43［5.4.–5.7.］.

10. *tā́m úpāhvayanta.* ‖　彼女を近くに呼び寄せた。

11. *ū́rja éhi svádha ehi sū́nr̥ta éhī́rāvaty éhī́ti.* ‖
「**滋養**（***ūrjā́-*** → 詩節26）よ，来い。**自決力**（自由に取る供物 ***svadhā́-***[10] → 詩節23）よ，来い。**精力旺盛であること**（**良き男性能力を持つこと** ***sūnŕ̥tā-***）よ，来い。**栄養を持つ女**（***írāvatī-*** → 詩節24, 29）よ，来い」と。

12. *tásyā índro vatsá ā́sīd. gāyatry àbhidhā́ny. abhrám ū́dhaḥ.* ‖
Indra が彼女の仔牛であった。Gāyatrī が（子牛と母牛を）結びつける紐［であった］。雨雲が乳房［であった］。

13. *br̥hác ca rathaṃtarám̐ ca dváu stánāv ā́stām. yajñāyajñíyaṃ ca vāmadevyám̐ ca dváu.* ‖
Br̥hat と Rathaṃtara と（両サーマン）が二つの乳首であった。Yajñāyajñiya と Vāmadevya と（両サーマン）が二つの［乳首であった］。

14. *óṣadhīr evá rathaṃtaréṇa devā́ aduhran. vyáco br̥hátā.* ‖
ほかならぬ植物たちを Rathaṃtara［サーマン］によって，神々は乳搾った，広がりを Br̥hat［サーマン］によって。

15. *apó vāmadevyéna. yajñám̐ yajñāyajñíyena.* ‖
水たちを Vāmadevya［サーマン］によって。祭式を Yajñāyajñiya［サーマン］によって。

16. *óṣadhīr evā́smai rathaṃtarám̐ duhe vyáco br̥hát* ‖
ほかならぬ植物たちを，この者のために，Rathaṃtara［サーマン］は乳として出す，広がりを Br̥hat［サーマン］は，

10　原義「自分で決定すること，自決裁量権」から「祭火に献供される神々への供物に対し，「祖霊自身が自分で決めて取る供物」を意味する。後の祭式体系では，「祖霊への供物（特に団子の湯気）」を指す。Gandharva が「香り」*gandhá-* により生きると述べる第27詩節および注11，注12を参照。

17. *apó vāmadevyáṃ yajñáṃ yajñāyajñíyaṃ yá véda.* ‖
水たちを Vāmadevya［サーマン］は，祭式を Yajñāyajñiya［サーマン］は，［そのように］知っている者があれば［→16. この者のために］。

［**Paryāya III**］［樹たち，祖霊たち，神々，人間たちによる Virāj の殺害と再生；献供・食事の起源と周期］

18. *sód akrāmat. sā́ vánaspátīn ā́gachat. tā́ṃ vánaspátayo 'ghnata. sā́ saṃvatsaré sám abhavat.* | *tásmād vánaspátīnāṃ saṃvatsaré vṛkṇám ápi rohati. vṛścáte*（+*vṛścyáte*）*'syā́priyo bhrā́tṛvyo yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は樹（木々の主 *vánaspáti-*）たちのもとに来た。彼女を樹たちは打ち殺した。彼女は１年間（*saṃvatsará-*）経つと，［再］生した。それ故，樹たちの中，切断されたもの（nt. *vṛkṇám*）も，1年間が経つと，成長する。このように知っているならば，その者の好ましくない競争相手は切り倒される。

19. *sód akrāmat. sā́ pitṝ́n ā́gachat. tā́ṃ pitáro 'ghnata. sā́ māsí sám abhavat.* | *tásmāt pitṛ́bhyo māsy úpamāsyaṃ dadati. prá* ***pitṛyā́ṇaṃ pánthāṃ*** *jānāti yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は父祖たちのもとに来た。彼女を父祖たちは打ち殺した。彼女は1月経つと［再］生した。それ故，**父祖たちに１月経つと［人々は］月例供物を**与える。このように知っているならば，その者は**父祖たちの通る道（*pitṛyā́ṇaṃ pánthām*）**を前もって（死ぬ前に）理解する。

20. *sód akrāmat. sā́ devā́n ā́gachat. tā́ṃ devā́ aghnata. sā́rdhamāsé sám abhavat.* | *tásmād devébhyo 'rdhamāsé váṣaṭ kurvanti. prá* ***devayā́naṃ pánthāṃ*** *jānāti yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は神々のもとに来た。彼女を神々は打ち殺した。彼女は半月経つと［再］生した。それ故，**神々に，半月経つと［人々は］*váṣaṭ* を行う（献供する）**。このように知っているならば，その者は**神々の通る道（*devayā́naṃ pánthām*）**を前もって（死ぬ前に）理解する。

21. *sód akrāmat. sā́ manuṣyā̀n ā́gachat. tā́ṃ manuṣyā̀ aghnata. sā́ sadyáḥ sám abhavat.* | *tásmān manuṣyèbhya ubhayadyúr úpa haranty. úpāsya gr̥hé haranti yá eváṃ véda.* ‖

彼女は歩み出た。彼女は人間たち（Manuṣ の子孫たち）のもとに来た。彼女を人間たちは打ち殺した。彼女は，同じ日のうちに，［再］生した。それ故，**人間たちに，昼間の両端に（昼間の始めと終わり，朝と夕に *ubhayadyúḥ*）**［**人々は食物を**］もたらす。このように知っているならば，その者の家において［人々は食事をもたらす］。

［**Paryāya IV – V.**］［アスラたち，祖霊たち，人間たち，7リシ，神々，Gandharva と Apsaras たち, 別の人々, 蛇たちの Virāj 搾乳と生きる糧の獲得］[11]

22. *sód akrāmat. sā́surān ā́gachat. tā́m ásurā úpāhvayanta mā́ya éhī́ti.* | *tásyā virócanaḥ prā́hrādir vatsá ā́sīd. ayaspātráṃ pā́tram.* | *tā́ṃ dvímūrdhārtvyò ’dhok. tā́ṃ māyā́m evā́dhok.* ‖ *tā́ṃ māyā́m ásurā úpa jīvanty. upajīvanī́yo bhavati yá eváṃ véda.* ‖

彼女は歩み出た。彼女はアスラたちのもとに来た。彼女をアスラたちは呼び招いた「マーヤー（計算測量能力；→1.1. RV X85, 18）よ，来い」と。彼女は歩み出た。Virocana Prāhrādi が彼女の子牛であった。卑金属の容器が（搾乳）容器［であった］。彼女を，Dvimūrdhan Ārtvya が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬマーヤーを［乳として］得た（*adhok:* 雌牛

11 Maitrāyaṇīya 派にのみ伝わる Gonāmika（牛の名称に関する諸儀礼）にパラレルが見られる。MS^{p} IV 2,2:21,14–19（神々が金の器で不死［をもたらす飲食物］を，祖霊たちが銀の器で Svadhā を，人間たちが木の器で「包み隠している（$^{+}$*vavrí-*）食物」を，アスラたちが漏れている卑金属の器で Surā 酒を搾乳した）; 2,13:36,8–17（神々が金の器により祭式と不死とを，祖霊たちが銀の器により滋養と Svadhā とを，人間たちが木の器により食物と子孫とを，リシたちが杯（*camasá-*）により韻律たちと家畜たちを，Gandharva と Apsaras たちが蓮の葉により良い香りを，蛇たちが瓢箪により毒を，アスラたちが漏れている卑金属の器により繁栄と破滅とを，Indra が，何であれこの世のすべてを搾乳した）。MS IV 2,1 には天野の研究があり，n.6で *annaṃ* $^{+}$*vavrí*「隠れた食物」の意味を論じている。牛乳から多数の乳製品が生み出されるので，牛乳を「(多くの食品を）包み隠している食物」と表現している可能性がある。MS^{p} IV 2,3:25,4; MānŚS IX 5,5,12f.; VārŚS-Pariśiṣṭa（Raghu Vira）I 20ff. は Ekāṣṭakā に牛を殺すことを述べる（→ 注18）。

と乳との double acc. を支配)。そのマーヤーを糧としてアスラたちは生きている。このように知っているならば，［その者はアスラたちに］生きる糧を与える者となる。

23. *sód akrāmat. sā́ pitṝ́n ā́gachat. tā́ṃ pitára úpāhvayanta svádha éhī́ti.* | *tásyā yamó rā́jā vatsá ā́sīd. rajatapātrā́ṃ pā́tram.* | *tā́m ántako mārtyavó 'dhok. tā́ṃ svadhā́m evā́dhok.* | *tā́ṃ svadhā́ṃ pitára úpa jīvanty. upajīvanī́yo bhavati yá eváṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は祖霊たちのもとに来た。彼女を祖霊たちは呼び招いた，「*svadhā́-*（自決力 → 注10）よ，来い」と。王 Yama が彼女の子牛であった。銀の容器が容器［であった］。彼女を，Mṛtyu（死）の息子 Antaka（終末をもたらす者）が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬ自決力を［乳として］得た。その自決力を糧として父祖たちは生きている。このように知っているならば，［その者は父祖たちに］生きる糧を与える者となる。

24. *sód akrāmat. sā́ manuṣyā̀n ā́gachat. tā́ṃ manuṣyā̀ úpāhvayantéírāvaty éhī́ti.* | *tásyā mánur vaivasvató vatsá ā́sīt. pṛthivī́ pā́tram.* | *tā́ṃ pṛ́thī vainyò 'dhok. tā́ṃ kṛṣíṃ ca sasyáṃ cādhok.* | *té kṛṣíṃ ca sasyáṃ ca manuṣyā̀ úpa jīvanti. kṛṣṭárādhir upajīvanī́yo bhavati yá eváṃ véda.*
彼女は歩み出た。彼女は人間（Manuṣ の子孫）たちのもとに来た。彼女を人間たちは呼び招いた，「*írāvatī-*（栄養をもつ女 → 詩節11）よ，来い」と。Vivasvant の息子 Manu が彼女の子牛であった。大地が容器［であった］。彼女を，Vena（付きまとう者）の息子 Pṛthī が搾乳した。彼女を搾乳して，**耕作と穀物**とを［乳として］得た。その耕作と穀物とを糧として人間たちは生きている。このように知っているならば，［その者は］耕作物に成功し，［人間たちに］生きる糧を与える者となる。

25. *sód akrāmat. sā́ saptarṣī́n ā́gachat. tā́ṃ saptarṣáya úpāhvayanta bráhmaṇvaty éhī́ti.* | *tásyāḥ sómo rā́jā vatsá ā́sīc. chándaḥ pā́tram.* | *tā́ṃ bṛ́haspátir āṅgirasó 'dhok. tā́ṃ bráhma ca tápaś cādhok.* | *tád bráhma ca tápaś*

ca saptaṛṣáya úpa jīvanti. brahmavarcasy ùpajīvanī́yo bhavati yá evám̐ véda. ‖
彼女は歩み出た。彼女は７リシたちのもとに来た。彼女を７リシたちは呼び招いた，「*bráhmaṇvatī-*（実現力のあることばをもつ女）よ，来い」と。王 Soma が彼女の子牛であった。韻律が容器［であった］。彼女を，Aṅgiras の息子 Bṛhaspati が搾乳した。彼女を搾乳して，***bráhmaṇ-*（実現力のあることば）と *tápas-*（熱力，苦行）**とを［乳として］得た。その *bráhmaṇ-* と *tápas-* とを糧として７リシたちは生きている。このように知っているならば，［その者は］*bráhmaṇ-* の効力をもち，［７リシたちに］生きる糧を与える者となる。

26．*sód akrāmat. sā́ devā́n ā́gachat. tā́m̐ devā́ úpāhvayantórja éhī́ti.* | *tásyā índro vatsá ā́sīc. camasáḥ pā́tram.* | *tā́m̐ deváḥ savitā́dhok. tā́m ūrjā́m evā́dhok.* | *tā́m̐ ūrjā́m̐ devā́ úpa jīvanty. upajīvanī́yo bhavati yá evám̐ véda* ‖
彼女は歩み出た。彼女は神々のもとに来た。彼女を神々は呼び招いた，「滋養（*ūrjā́-*）よ，来い」と。Indra が彼女の子牛であった。杯（*camasá-*）が容器［であった］。彼女を，Savitar（「権限を与える神」）が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬ**滋養**を［乳として］得た。その滋養を糧として神々は生きている。このように知っているならば，［その者は神々に］生きる糧を与える者となる。

27．*sód akrāmat. sā́ gandharvāpsarása ā́gachat. tā́m̐ gandharvāpsarása úpāhvayanta púṇyagandha éhī́ti.* | *tásyāś citrárathaḥ sauryavarcasó vatsá ā́sīt. puṣkaraparṇám̐ pā́tram.* | *tā́m̐ vásurucíḥ sauryavarcasó 'dhok. tā́m̐ púṇyam evá gandhám adhok.* | *tám̐ púṇyam̐ gandhám̐ gandharvāpsarása úpa jīvanti. púṇyagandhir upajīvanī́yo bhavati yá evám̐ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は Gandharva と Apsaras たちのもとに来た。彼女を Gandharva と Apsaras たちは呼び招いた，「清浄な（よい）香りをもつ者よ，来い」と。Sūryavarcas（太陽の効力をもつ者）の息子 Citraratha（極彩色の戦車をもつ者）が彼女の子牛であった。蓮の葉が容器［であった］。彼女を，Sūryavarcas の息子 Vasuruci（良い好みをもつ者）が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬ**清浄な（良い）香り（*gandhá-*）**を［乳として］

得た。その清浄な（良い）香りを糧として Gandharva と Apsaras たちは生きている[12]。このように知っているならば，［その者は］清浄な（良い）香りをもつ者として，［Gandharva と Apsaras たちに］生きる糧を与える者となる。

28. *sód akrāmat. sétarajanā́n ā́gachat. tā́m itarajanā́ úpāhvayanta tírodha éhī́ti.* | *tásyāḥ kúbero vaiśravaṇó vatsá ā́sīd. āmapātrám̐ pā́tram.* | *tā́ṃ rajatánābhiḥ kāberakó 'dhok. tā́ṃ tirodhā́m evā́dhok.* | *tā́ṃ tirodhā́m itarajanā́ úpa jīvanti. tiró dhatte sárvaṃ pāpmā́nam. upajīvanī́yo bhavati yá evā́ṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は別の（異郷の）人々のもとに来た。彼女を別の人々は呼び招いた，「秘匿よ，来い」と。Viśravana（広く聞く力／聞こえをもつ者）の息子 Kubera（財の神）が彼女の子牛であった。生の容器（焼かれていない土器）が容器［であった］。彼女を，Rajatanābhi（銀の臍をもつ者）［という］Kāberaka が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬ<u>**秘匿**</u>を［乳として］得た。その秘匿を糧として，別の人々は生きている。このように知っているならば，［その者は，自分の］すべての悪を秘匿する。［その者は，別の人々に］生きる糧を与える者となる。

29. *sód akrāmat. sā́ sarpā́n ā́gachat. tā́ṃ sarpā́ úpāhvayanta víṣavaty éhī́ti.* | *tásyās takṣakó vaiśaleyó vatsá ā́sīd. alābupātrám̐ pā́traṃ.* | *tā́ṃ dhṛtárāṣṭra airāvató 'dhok. tā́ṃ viṣám evā́dhok.* | *tád viṣám̐ sarpā́ úpa jīvanty. upajīvanī́yo bhavati yá evā́ṃ véda.* ‖
彼女は歩み出た。彼女は蛇たちのもとに来た。彼女を蛇たちは呼び招いた，「毒をもつ女よ，来い」と。Viśāla（広い小屋をもつ者）の息子 Takṣaka（「大工さん」）が彼女の子牛であった。瓢箪の容器が容器［であった］。彼女を，Irāvatī（栄養をもつ女 → 詩節11）の息子 Dhṛtarāṣṭra（「持国」）が搾乳した。彼女を搾乳して，ほかならぬ**毒**を［乳として］得た。その毒を糧として，

12 *gandhá-* による Gandharva の通俗語源説であるが，仏教に受け継がれる。祖霊たちもまた，祖霊祭の供物（→ 注10），例えば団子の「香り」*gandhá-* のみを食すという見解が普及している。Gandharva と Apsaras たちは下層の神々であるが，祖霊たちに由来する可能性が強い，cf. 後藤 2009 32.

蛇たちは生きている。このように知っているならば，［その者は蛇たちに］生きる糧を与える者となる。

［**Paryāya VI**］［毒に関する呪術］

30. *tád yásmā eváṃ vidúṣe 'lā́bunābhiṣiñcét pratyā́hanyāt.* ‖
それ故，このように知っている者に瓢箪を用いて注ぎかける場合には，［当人はそれを］はねつけるべし。

31. *ná ca pratyāhanyā́n mánasā tvā́ pratyā́hanmī́ti pratyā́hanyāt.* ‖
［それを］はねつけない場合には，「思考によって，君を私ははねつける」と［唱えて］はねつけるべし。

32. *yát pratyāhánti viṣám evá tát pratyā́hanti.* ‖
はねつける場合には，ほかならぬ毒を，それにより，はねつける［ことになる（*evá*）］。

33. *viṣám evā́syā́priyaṃ bhrā́tṛvyam anuvíṣicyate yá eváṃ véda.* ‖
このように知っているならば，ほかならぬ毒が，この者の好ましくない（仲間でない）競争相手を追ってまき散らされる［ことになる］。

第1 Paryāya では，祭火・集会所への歩みが，第2 Paryāya とその拡張版である第4・5 Paryāya では搾乳が主題であるのに対し，第3 Paryāya では殺害と再生が主題となることが注目される[13]。Virāj の死と再生の周期が，樹たち，祖霊たち，神々，人間たちの生命力（供物・食物）を摂取する周期と一致する。

第18詩節「彼女（Virāj）を樹（*vánaspáti-*）たちは打ち殺した。彼女は1年間（*saṃvatsará-*）が経つと，［再］生した」は，Virāj を先行詩節のように雌牛と解すれば，毎年の牛の犠牲祭を意味する[14]。樹（*vánaspáti-*）は切り倒されて，

13　Virāj の殺害というモティーフは，Puruṣa の殺害と解体（神々による供儀）による諸存在の発生を説く Puruṣa 讃歌（RV X 90,6ff.）の延長上にある。祭式を供物（動物，Soma，穀物など）の殺害とみなす観念はブラーフマナで更に発展する（例えば ŚB XI 1,2,1; XI 6,1 = JB I 42–44［Bhṛgu の他界巡り］）。

14　Śrauta 祭では朔または望の日に行われる。Soma 祭・Sattra 祭に付随しない，独立した動物犠牲祭（*nirūḍha-paśubandha-*）は1年または半年毎に行われ，本来は冬至・夏至に（狩猟・牧畜・農耕の）豊穣を祈願する祭式であったかと推測される。犠牲獣は通例，雄山羊であるが，牛，羊等も用いられる（cf. Schwab XIII–XV）。Soma 祭は必ず動物犠牲祭を伴うが，基本形である Agniṣṭoma は毎年，春（*vasanta-*）に

犠牲獣が繋がれる祭柱（*yū́pa-, sváru-*）となり，犠牲獣を天へと届ける[15]。Virāj の１年後の再生は，雌牛が一年毎に仔牛を生むことを示唆する。*saṃvatsará-*「歳，１年」の原義は「誕生した仔牛が成牛となる期間」であるが，雌牛の出産周期にも一致し[16]，また，樹にとっても死と再生の周期である：「樹々の中，切断されたもの（nt. *vr̥kṇám*）も，１年間（*saṃvatsará-*）が経つと，成長する」。他方，Virāj を後続詩節のように，植物（樹木，牧草，穀草）の「滋養，栄養」と解すれば，毎年，冬または早春に山野を焼く風習と儀礼を反映する可能性もある。牛の供儀と野焼きの両儀礼を併せ持つ祭式としては，１年間続く Sattra 祭 Gavāmayana「牛たちの行路」が想起される[17]。Paryāya IV–V「諸存在による Virāj 搾乳」のパラレルを示す Gonāmika（→ 注11）も，Ekāṣṭakā（Māgha 月黒半月８日→ 注１）に牛を殺すことを述べる[18]。「牛（動物）殺し」と「樹（植

開催される（Caland/Henri 1; ĀpŚS X 2,2–8; MānŚS II 1,1,1; KātyŚS VII 1,5）。1年間の Sattra 祭 Gavāmayana（→ 注17）では最終日前日 Mahāvrata（古代の冬至）に雄牛の供儀が行われる。Gonāmika（→ 注11）では Ekāṣṭakā に雌牛の供儀と饗応を行う（→ 注18）。家庭祭では，客人接待，婚礼（→ 2.2. RV X 85,13），祖霊祭 Aṣṭakā（冬至前後の黒半月8日目；Ekāṣṭakā が特に重要），Śūlagava（「家畜の主」Rudra/Śiva への牛の供儀）の場合に牛殺しが許される。当該詩節で示唆される牛の供儀も，冬至の後の新年祭，あるいは Ekāṣṭakā（→ 注１）に行われた可能性が高い。

15　「樹（木々の主）よ，綱によって縛り付けて，神々の下へと［犠牲獣を］運び届けるがよい」RV X 70,10「アープリー讃歌」）；祭柱として切り倒された木への成長祈願「樹よ，100の枝芽をもって茂れ」RV III 8,11「祭柱（*sváru-*）讃歌」= TS[m] I 3,5,1［h］），cf. 後藤2008 91, 95, 97, Schwab 7。

16　雌牛の発情は平均23日周期で通年あるが，繁殖周期は，約280日の妊娠期間＋分娩から再受胎までの期間であり，1年毎の出産（約10ヶ月の泌乳期＋約2ヶ月の乾乳期）が望ましい。Cf. 阿部等「家畜飼育の基礎」10, 20f., 109, 122。

17　Ekāṣṭakā（→ 注1）の日に藪焼きを行い，新年の豊凶を占った後，潔斎を開始する（TS[p] III 3,8,4f.［Dīrghasattra］; cf. Sakamoto 2000（1）483 n.42）。１年間，毎日，動物供儀を行うが，特に，中間日 Viṣuvat（古代の夏至にあたる）には太陽 Sūrya への追加供儀（KātyŚS XIII 2,10; ĀpŚS XXI 23,1 雄山羊），最終日前日 Mahāvrata（古代の冬至にあたる）には Prajāpati へ追加供儀（KātyŚS XIII 2,16; ĀpŚS XXI 23,4 雄牛）を行う（ŚB IV 6,3,3）。Mahāvrata を含む特定日には「牛類」（雄牛，雌牛，仔牛，羊など）の供儀を行う（ĀpŚS XXI 3,4.10.12）。

18　MS IV 2,3:25,4 *tád yá eváṁ vídvān ekāṣṭakāyāṃ gā́ṁ haté saṁvatsarā́yaivá kṣúdhaṁ hate*「そこで，このように知った上で，Ekāṣṭakā に自分のために雌牛を殺すならば，その者は，他ならぬ一年間（*saṁvatsará-*）に対して，自分のために飢えを殺すことになる」。MānŚS IX 5,5,12（≈ VārŚS-Pariśiṣṭa I 20ff.）*ekāṣṭakāyāṃ catuṣ-pathe ’ṅgaśo gāṃ kārayed yoya āgacchet tasmaitasmai dadyāt.*「Ekaṣṭakā の日に四つ辻で，肢毎に雌

物）殺し」の両方に関わる新年の豊穣儀礼（→ 注22）が当該詩節の背景にあった可能性が考えられる。（Sakamoto 2001 163 n.15; 阪本2015 93の説明を補足訂正する。）

第19詩節は，毎月，朔の午後に祖霊たちに供物を与える祖霊祭の起源，第20詩節は半月ごとに神々に供物を捧げる新月満月祭の起源，第20詩節は夕と朝の人間の食事とそれに対応する（食事の前に祭火に供物を献じる）Agnihotra の起源を説明する。

2. **RV X** 85（≈ AV XIV 1）は「婚姻の歌」として有名であるが，月・太陽・恒星・惑星の観察による天文学と暦学の知識が祭式や儀礼の根底にあることを示す好例である。5部から構成されるが, 本来は第１部（詩節１−５）と第２部（詩節６−13）から成り，それに順次，増補されて編集されたと推測される。

2.1. 第1部（5 Anuṣṭubh）は毎月の新月祭における Soma 献供を主題とする。Sūryā への言及は無い。植物（麻黄）の搾汁である Soma が，同時に，天上の月であり，神々に飲食されるという，バラモンのみが知る，当時としては革新的な，秘密の知識に基づき，**毎月の新月祭に Soma が圧搾，献供される。**

１．*satyénóttabhitā bhū́miḥ* ¦ *sū́ryeṇóttabhitā diyaúḥ* |
ṛténādityā́s tiṣṭhanti ¦ *diví sómo ádhi śritáḥ* ‖
真実により地は張り支えられている。太陽により天は張り支えられている。天理（*ṛtá-*; → １）により Āditya 神たちは立っている。天の上に Soma（月）が依拠している。

２．*sómenādityā́ balínaḥ* ¦ *sómena pṛthivī́ mahī́* |
átho nákṣatrāṇām eṣā́m ¦ *upásthe sóma ā́hitaḥ* ‖
Soma により Āditya 神たちは力を有する。Soma により地は大きい。他方

牛を［殺害解体］させて，もし［その四つ辻に］来る人がいれば，その度に，その人に与えるべきである。」; 13 *śvo 'nyāṃ kārayitvā brāhmaṇān bhojayet paśukāmaḥ.*「翌日，他の［雌牛］を［殺害解体］させて，バラモンに享受させるべきである，家畜を望む者は」。

また，これらの月宿たち（月の宿る星々 : *nákṣatra-*）の膝（腰）の上に Soma（月）は置き定められている。

３．*sómam manyate papivā́n* ¦ *yát sampiṃṣántiy óṣadhim* |
sómaṃ yám brahmā́ṇo vidúr ¦ *ná tásyāśnāti káś caná* ‖
Soma を［私は］飲んだのだと［祭主は］思う, 植物（である Soma）を［祭官たちが］圧搾しおえる時。バラモンたちが知っている Soma（月），それを誰であれ食することはない。

４．*āchádvidhānair gupitó* ¦ *bā́rhataiḥ soma rakṣitáḥ* |
grā́vam íc chṛṇván tiṣṭhasi ¦ *ná te aśnāti pā́rthivaḥ* ‖
覆い包む装具たちに守られて，高きにある者たちに護られて，Soma（月）よ，（植物 Soma を）圧搾する石［の音］を聞きながら，君は立っている。地に属する者は君を（部分の所有格）食さない。

５．*yát tvā deva prapíbanti* ¦ *táta ā́ pyāyase púnaḥ* |
vāyúḥ sómasya rakṣitā́ ¦ *sámānām mā́sa ā́kṛtiḥ* ‖
君（植物汁 Soma）を，神よ，［神々が］飲み始めると，すると，君（月）は再び満ちる。風が Soma の護り手である。暦月が年たちの原型である。

第４詩節は新月祭当日を描写する。朔の夜に続く朝，月 Soma は太陽と一緒に昇り，天の高みから，地上で植物 Soma を搾る音を聞いている。月を守る「覆い包む装具たち」は太陽光線たち，月を護る「高きに住む者たち」は第5詩節でも「護り手」とされる風たちと推測される（山野に自生する植物 Soma は風と深い関係を持つ)。この月が神々の飲食する Soma であり，「地に属する者は君を飲食しない」。第5詩節で「神」と呼ばれる「君」は月を指すと同時に，植物の搾汁でもあり，意図的に謎めいた表現がなされる。月である Soma は神々に飲食されて消滅し，朔の夜となる。翌朝，人間が地上で植物である Soma を圧搾して献供し，それを神々が飲み始めると，月である Soma は神々の飲食から解放され，再び，天に現れ増大する。満月になると，神々は月である Soma を飲食し始め，月が次第に消滅する，という過程が理解される。この思想は更

に展開し，ウパニシャッドの「二道説」に至る（cf. 阪本 2015 23–27, 62–70）。

2.2. 第２部（８ Anuṣṭubh）は，月と太陽との合である「朔」を太陽女神 *sūryā́-*[19] と月神 Soma との結婚とみなし，日の出前に東の空に昇る朔直前の月（有明の月）に向かって，太陽が昇り進む天文現象を，**Sūryā が夫 Soma の家に向かう嫁入行進**として描く。

内惑星である金星は584日周期で，外合（不可視）→「宵の明星」*nā́satya-* → 内合（不可視）→「明けの明星」*aśvín-* と変化する。金星の周期と月の朔望周期とは一致しないが，しばしば，朔の前に「明けの明星」と「有明の月」が，朔の後に「宵の明星」と「夕月」が並び現れることから，Aśvin と Nāsatya が太陽と月の仲を取り持つ *vará-*「(未婚の娘に）婿を選ぶ者，仲人」となる。

Savitr̥（太陽に対し「教令，指示，権能付与」の機能を持つ「鼓舞する」神）が Sūryā を月 Soma に与える。Sūryā は白く輝く2頭の牛が牽く「思考から成る（*manasmáya-*）荷車（*ánas-*)」(詩節10・12）に乗り，夫の家へと天の道を進む。

19 *sū́rya-* m.「太陽（神)」が，男性神である月 Soma と婚姻する必要上，女性神 *sūryā́-* に転換されたと推測される。当該スークタでは，Savitr̥ 神が Sūryā の父親の役目を果たす。Sūryā は RV にしばしば言及され，一般に太陽神 Sūrya の娘とされる（cf. Geldner IV 124f., Witzel/ Gotō 848, Witzel/Gotō/Scarlata 666)。X 85以外はすべて Aśvin 讃歌に現われ，「Sūrya の娘」Sūryā が両 Aśvin の戦車 *rátha-* に乗るという内容が殆どであるが，両 Aśvin が彼女の夫となるという記述も１例ある。(Ⅳ 43, 6 d *yéna pátī bhávataḥ sūriyā́yaḥ*)。Ⅰ184,3 は両 Nāsatya が Sūryā の婚礼に呼ばれて来ることを示唆するが，Sūryā の結婚相手は不明である。(Geldner Ⅰ264の解説「Sūryā が両 Aśvin を自ら結婚相手に選び，両名が新郎として新婦 Sūryā を自らの家に運んだ」は容認しがたい)。Aśvin 讃歌の諸例では月への言及はなく，金星と太陽の接近（ないし合)，特に，明けの明星を追って朝の太陽が昇る天体現象を神話化したものと理解される。他方，RV X 85 では月と太陽の合（朔）に基づく「月 Soma と太陽 Sūryā との婚姻」が歌われ，Sūryā は *ánas-*「荷車」に乗り嫁入りする（ただし第26詩節では Aśvin の *rátha-*「戦車」)。「太陽と月」「太陽と金星」という異なる二系統の神話の混在が推測される。―― 太陽の娘を巡って金星と月が競走する神話（ラトヴィアの歌）などに関しては，cf. Güntert 260–266.

［6–8 略］

9．*sómo vadhūyúr abhavad* | *aśvínāstām ubhā́ varā́* |
sūryā́ṃ yát pátye śáṃsantīm | *mánasā savitā́dadāt* ‖

Soma（月）が嫁を求める者となった。両 Aśvin（Aśvin と Nāsatya）が仲人（*vará-*）であった。思考により［同意を］表明している Sūryā を夫に Savitṛ が与えたとき。

10. *máno asyā ána āsīd* | *d$_{i}$yáur āsīd utá chadíḥ* |
śukrā́v anaḍvā́hāv āstāṃ | *yád áyāt sūr$_{i}$yā́ gṛhám* ‖

思考が彼女の荷車（*ánas-*）であった。天が，また，覆い（幌）であった。両の白い輝きが両の荷車牽き［牛］であった，Sūryā が［夫 Soma（月）］の家に馳せたとき。

11. *ṛksāmā́bhyām abhíhitau* | *gā́vau te sāmanā́v itaḥ* |
śrótraṃ te cakré āstāṃ | *diví pánthāś carācaráḥ* ‖

Ṛc と Sāman により結び付けられた，君の従順な両牛は行く。聴覚が君の両輪であった。天には，繰り返し行く（*carācará-*）[20]道が［あった］。

12. *śúcī te cakré yātiyā́* | *v$_{i}$yānó ákṣa ā́hataḥ* |
áno manasmáyaṃ sūryā́- | *$_{\acute{\bar{a}}}$rohat prayatī́ pátim* ‖

清く輝く両者が，馳せ進む君の両輪で［あった］。［行きわたる］息が車軸として嵌められて［あった］。思考から成る荷車に Sūryā は乗った，［彼女が］夫のもとに出発した時。

13. *sūryā́yā vahatúḥ prā́gāt* | *savitā́ yā́m avā́sṛjat* |
aghā́su（**AV *maghā́su***）*hanyante gā́vó-* |
$_{\acute{\bar{a}}}$rjunyoḥ（**AV *phálgunīṣu***）*pári uhyate* ‖

Savitr が送り出した Sūryā の嫁入行列が（今まさに）進み出した。［月が］**Aghā**（AV Maghā）［星］たちにある時，牛たちが殺される。［月が］両 **Arujunī**（AV Phalgunī）［星］にある時，［花嫁は夫のもとへ］巡り運ばれる。

20 Cf. Hoffmann 1960 248 (=1975 119).

第13詩節では，牛殺しと嫁入り行進出発の時が「月宿」により示される（月宿の具体名が現れる最古例である , cf. Sakamoto 2011 1076.）。*aghā́-*（f. pl.）「厄災（死）をもたらす（星たち）」（AV 以降 *maghā́-*「能力ある（星たち）」）は獅子座頭部の諸星［レグルスなど］に，*árujunī-*（f. du.）「白く輝く2星」（AV 以降 *phálgunī-*；YV 以降 *pū́rva-* と *úttara-* の2月宿に分割）は獅子座後部の白色2星（δとθないしβ）に同定される。

レグルス（黄経150度）は B.C. 2300年頃に夏至点（黄経90度）にあり，夏至前後には朔の月（と太陽）がレグルス近辺に位置する；逆に，冬至前後には満月がレグルス近辺に位置する（従って Māgha 月は冬至月となる）（→ 注１）。当該詩節では，月と太陽の合（朔）が主題であるから，夏至前後の時期（およそ Śrāvana 月末から Bhadrapada 月にかけて）が該当し[21],「朔の前々夜の月（月齢27〜28程）が Aghā（獅子座頭部）に宿る時に牛が殺される」,「朔前夜の月（月齢28〜29程）が Arujunī（獅子座後部）に宿る時に Sūryā が月へと進む」，その結果，朔となると理解される。

牛殺しは，嫁取りに来た婿を花嫁の実家で饗応する儀礼と思われるが，夏至に行われる動物犠牲祭との関連も否定できない（→ 注14）。第11詩節 Sāman は Soma 祭を示唆する。夏至直後の朔が「太陽と月の聖婚」と見なされ，動物犠牲祭とソーマ献供を伴う盛大な新月祭が行われた可能性がある。

このような，特定の天体（太陽，月，金星，獅子座）の運動と結びついた，年に一度の牛の供犠を伴う祭式は，イランから古代ローマに信仰が拡がった太陽神ミスラ[22]（〜 ved. *mitrá-*「契約（の神格化）」）の牛殺しの儀礼と聖婚を想起させる。またミスラと黄道12宮（特に牡牛座と獅子座），惑星（特に金星）および新月（三日月）との関係も注目される。

21　阪本 2015 22「1年の最後に位置するマーガ月に牛が屠られ（牛の犠牲祭），1年の最初に位置するパールグナ月に婚姻が挙行されます」は誤りとして訂正する。

22　Cf. Merkelbach 9–22, 100–109, 272（Abb.13 Kommagne 出土浮彫：獅子座胸部のレグルスの下に三日月，背の上に火星，水星，木星が示され，B.C.62年の惑星合を示す），302（Abb.47 Rom 出土浮彫：ミスラの屠る牛の腹部に三日月があり，牛の尾が穂となる；周囲に犬，蛇，サソリ，からす（星座），左上に太陽神，右上に月女神（新月の冠），左右に明けと宵の明星が上向きと下向きの松明を掲げる［春分と秋分を象徴？］), 324（Abb.74 黄道12宮がミスラを囲む）等。多くの図像で，殺される牛の尾が穀物の穂に変化しており，牛の供儀と豊穣儀礼との関係を示す。牡牛座と太陽の合，三日月，周辺の星座からは，春分の新年祭が示唆される。

Taittirīya-Brāhmaṇa I 5,1,2 は月宿を列挙説明するマントラ中で，当該月宿と祖霊たち，牛，婚姻，嫁入との関係を述べる（cf. Sakamoto 2011 1080）：

pit̥ṇā́m maghā́ḥ | *rudántaḥ parástād apabhraṁśò 'vástāt* | ***aryamṇáḥ pū́rve phálgunī*** | *jāyā́ parástād r̥ṣabhò 'vástāt* | ***bhágasyóttare*** | *vahatávaḥ parástād váhamānā avástāt* ||

Maghā［の星々］は祖霊（父祖）たちに属する。泣いている者たちが向こう側に，脱落がこちら側にある。初めの２つの Phalgunī は Aryaman（部族慣習法の神格化）に属する。妻が向こう側に，雄牛がこちら側にある。後の２つ［の Phalgunī］は Bhaga（分配の神格化）に属する。嫁入りに持参する諸財が向こう側に，［花嫁を］運んでいる者たちがこちら側にある。

2.3.　第3部（詩節14–17; 1 Triṣṭubh + 3 Anuṣṭubh）は，婚姻に先立ち，仲人として Savitr̥ のもとに行く両 Aśvin の 3 輪戦車に関し，その第 3 輪とは何かと問う謎かけの歌である。第 1 輪は北行する 6 朔望月，第 2 輪は南行する 6 朔望月，第 3 輪は第13月（閏月）という答えが予想される。朔望月と太陽年 *saṁvatsará-* の間隙を埋める第13月は RV 以降，特にブラーフマナで愛好される主題となる（→ 注１）[23]。韻律と内容から二次的増補と思われる。

2.4.　第4部（詩節18–19; 2 Triṣṭubh）は月と太陽の運動に関する天文学・暦学の知識を披露する歌である（→ **1. 1.**）。両詩節とも「婚姻」とは直接関係しない。ペアとして，RV X85全体に対応する AV XIV 1,23–24 以外にも，AV VII 81,1–2［Darśa「新月」讃歌］，MS[m] IV 12,2:181,3–6［Rājayakṣman 治癒願望祭（cf. Sakamoto 2010(2) 1123f.）に現われる。第18詩節単独では，AV XIII 2,11 (abc)；TB[m] II 7,12,2; 8,9,3等に現れる。第19詩節単独では，［Rājayakṣma 治療願望祭］TS[m] II 4,14,1；TS[p] II 3,5,3；KS[m] X 12:141,11f. に用いられ，また，Hiraṇyakeśi-Gr̥hyasūtra I 5,16,1では新月祭の後，はじめて見る月へ唱えるマントラの一つとされる。

23　例えば，［R̥bhu 三神の12夜］RV I 161,11–13, IV 33,7;［第13月］RV I 25,8; AV V 6,4（Indra の家）; MS[p] I 5,6:74,16; JB II 334, III 386;［第13月＝ *upamāsa*］JB I 18, I 50; KauṣUp I 2。Cāturmāsya 祭 Śunāsīrya は朔望年と太陽年との間隙を埋める。

2.5.　第5部（詩節20–47; 2 Triṣṭubh + 26 Anuṣṭubh）は新婦が夫の家に入る際の祝詞で，家庭祭的な性格が強い。Sūryā は荷車 *ánas-*（詩節10および12）ではなく Aśvin の戦車 *rátha-* に乗ることが注目される（詩節26）（→注19）。

3.　RV 10巻では人類の始祖 Yama と祖霊たちが，天上にある祖霊の世界で（神 Varuṇa や神々と共に），あるいは地上での祖霊祭に呼ばれ，Soma を自由に（*svadhā́-* により；→ 注10）飲んで酔う情景が描かれる（cf. 阪本 2015 43–50）。Yama とリシ達を祭る祭式では Soma 献供に加え Sāman も朗唱され，シュラウタ祭式 Soma 祭に類似する。祖霊たちが RV 以降一貫して *somyá-*「Soma に与る者 (後には息子などへの呼びかけとして多用)」と呼ばれることも注目される。シュラウタ祭式としての Soma 祭では，本祭の第 3 Savana（夕の Soma 圧搾・献供）の中で祖霊祭が行われる。Soma 祭に神々と並んで祖霊たちも列席していることが窺えるが，供物は Soma ではなく，Puroḍāśá の残り物から作った団子である。

4.　上記の諸点は，RV および先行するインド・イラン共通時代において，新月祭および祖霊祭に Soma（麻黄の搾汁）の献供が行われたことを示唆する。高地ステップ帯から，インド内陸部に進出するに伴い，入手が困難となったため，Soma 献供が祖霊祭において消滅し，また，新月祭では Sāṃnāyya により代用され[24]，さらに満月祭と同じ供物に変化したのではないかと推測される。

24　Sāṃnāyya と Soma（麻黄の搾汁）の同一視に関しては, 西村2010 108(147)－98(157) が詳論している。筆者は，その前段階として，*dadhi-*「酸乳」と Soma の等置が，酸乳製造と Sāṃnāyya 献供に関するマントラとブラーフマナに広く見られること，および，Sāṃnāyya 献供と Soma 献供の等置が YV の最古層で確立していたことを指摘したい。―― 新月祭での Sāṃnāyya 献供の材料として，前夜に酸乳を準備する。具体的には，夕に搾乳した牛乳を加熱した後，*ātañcana-*「凝固（酸発酵）促進剤」を加えて，マントラを唱える：MS^{m} I 1,3:2,10–11 *índrāya tvā bhāgáṁ sómenā́tanacmi*「Indra のために，君(加熱牛乳)を分け前として，Soma により私は凝固させる」；KS^{m} I 3:2,7 *índrasya tvā bhāgáṁ sómenā́tanacmi* = VS-M I 4（VS-K I 2,4 *ā́tanakmi*）「Indra の分け前として, 君（加熱牛乳）を Soma により私は凝固させる」;TS^{m} I 1,3,1 *sómenā́ tvātanacmī́ndrāya dádhi*「Soma により，私は君（加熱牛乳）を凝固させる，Indra のために酸乳へと」。*ātañcana-* として，現実には Soma ではなく，酸乳（Agnihotra 供物の残り）が用いられる（cf. op.cit. 113–114, 109）。従って，上記マ

Soma（麻黄）はインド・ヨーロッパ語族共通時代には知られておらず，インド・イラン共通時代に異文化との接触から取り入れられた可能性が強い。そ

ントラでは一貫して，酸乳と Soma の等置が前提とされる。—— マントラの解説散文も，同様に，「酸乳＝ Soma」という前提に立つ：MSᵖ IV 1,3:5,10–12 *índrāya tvā bhāgáṁ sómenā́tanacmī́ti. sómam evaínat karoti. tásya ha tvái somapīthá̄ḥ sáṃtato yá eváṁ vidvā́nt sānnāyyáṃ píbati*「『Indra のために君を…凝固させる』と［唱える］。当のもの（加熱生乳）をほかならぬ Soma にすることになる。他方，つまり，このように知った上で Sāṃnāyya を飲むならば，その者により Soma を飲むこと（Soma 祭執行）が継続されているのだ」。「Soma ＝酸乳」の添加により，加熱生乳を「Soma ＝酸乳」にする。従って，翌日「Soma ＝酸乳」と加熱生乳を混合した Sāmnāyya を飲むことは，Soma を飲むことになる。—— MSᵖ では Sāṃnāyya と Soma の等置が当然の前提となっているが，KSᵖ と TBᵖ では明記される：KSᵖ XXXI 2:3,12–14 … *somo vai devānāṃ parokṣaṁ sānnāyyam* …「Sāṃnāyya は，神々の隠された表現では，Soma なのだ」；TBᵖ III 2,3,10f. … *sómaḥ khálu vái sāṃnāyyám* …「Sāṃnāyya は，周知の如く，Soma なのだ」。—— VS を解説する ŚB I 7,1,18–19 は，酸乳ないし Sāṃnāyya が Soma であるという記述を欠く。代わりに，ŚB I 6,4,1–9（op.cit. 100［155］ff.）が Indra への Sāṃnāyya 献供を根拠づけるが，Soma に該当するのは「酸乳」である：7. *táṃ góbhir anuviṣṭhā́pya sámabharan./ yád óṣadhīr ā́śnaṃs tád oṣadhibhiyo. yád apó 'pivaṃs tád adbhyás. tám evaṁ saṃbhṛtyā́tacya tīvrīkṛ́tya tám asmái prā́yacchan.*「それ（地上の草や水に入った月＝ Soma）を追い求め，牛たちを分散させた。もし草たちを［牛たちが］食べたならば，その場合は，草たちから。もし水たちを［牛たちが］飲んだならば，その場合は，水たちから。それ（地上の草や水に入った月＝ Soma）を，このように寄せ集め，凝固させ，刺激的な味にして，それ（Soma）をこの者（Indra）に指し出した」。牛から搾乳し凝固させ刺激的な味にしたものは *dádhi-*「酸乳」に他ならない。それを Soma とみなし，Indra に献じる。その後，「Soma ＝酸乳」の消化吸収を容易にするために加熱乳を添加するが，Sāṃnāyya と Soma の同一視は述べられない。パラレルである TSᵖ II 5,3,2–4（op.cit. 101［154］f.）でも，主旨は「酸乳が Indra を養った」，すなわち「酸乳が Soma の代用である」ことにあり，Sāṃnāyya への言及は見られない。 —— 上記の資料からは，YV マントラにおいてもブラーフマナ（MSᵖ，TSᵖ，ŚB）においても「酸乳＝ Soma」の観念が確立していたことが明白である。「刺激的（*tīvrá-*）な味」を持つ点でも，*dádhi-*「酸乳」と Soma は共通しており，等置を理解しやすい。他方，KSᵖ と TBᵖ は「Sāṃnāyya ＝ Soma」を周知のこととして言及しており，Soma 献供の代理としての Sāṃnāyya 献供が，MS の段階から普及していたと推測される。—— 西村 op.cit. 103（152）「sāṃnāyya と Soma との同一視は，以下の順に強まっていると考えられる：MS → KS → TB → ŚB」という見解とは逆に，古い文献ほど Sāṃnāyya と Soma の同一視が強固であり，新月祭において Indra に Soma の代わりに Sāṃnāyya を献供することが普及していたと考えられる。時代とともに Puroḍāśa 献供に座を奪われ，廃れつつあった Sāṃnāyya 献供を，Indra 崇拝の傾向が強い ŚB が Soma 祭の代用として，新たに取り上げ宣伝したのではないかと推測される（→ 注25）。

れ以前の新月祭および祖霊祭に関しては資料がなく，憶測の域を出ないが，新月が月と人との再生を象徴し生殖に関わることから，新月祭では，精液に類似する白濁した液体, 例えば, 加熱生乳 *śṛtá-*, 酸乳 *dádhi-*, 両者の混合（*sāṃnāyyá-*, *vā́jina-*，等）[25]，穀物の（酸）乳煮 *odaná-/carú-* などが用いられた可能性がある。

25　加熱生乳と酸乳の混合製品に関しては，西村2010，Nishimura 2011の研究があるが，筆者の気付いた点を注記したい。新月祭 Sāṃnāyya 献供では，当日朝に搾乳され熱された牛乳（*śṛtá-*）と，前夜に搾乳された酸乳（*dádhi-*）とを，献供直前に祭匙 *srúc-* に混入する。これに対し，Cāturmāsya 祭では，当日の供物調理時に容器内に両者を混入し，自然に凝固する *āmíkṣā-* と液状物 *vā́jina-* とを Viśve Devāḥ 等への供物に用いる：ĀpŚS VIII 2,5 ***tapte*** *prātardohe sāyaṃdoham ānayati*「朝に搾乳された牛乳が熱された（*tapta-*）ならば，それに昨夜に搾乳した［酸乳］を加え入れる」; 6 *yat saṃvartate sāmikṣā. yad anyat tad vājinam*「凝固するならば, それが Āmikṣā である。別様であるならば，それが Vājina である」。自然放置でもよいが，より進んだ方法としては, 混入後に適温で熱し水分を蒸発させる（*śrapáya-*[ti]「熱で水分を蒸発させる, 乾燥させる」cf. 尾園11）：BaudhŚS VI 1 *athottaratas tiraḥ pavitraṃ paya ānīyāmikṣāyā adhiśrayati. … tiraḥ pavitraṃ tapte payasi dadhy ānayati. sāmikṣā bhavati. tāṃ ya eva kaś ca kuśalaḥ parīndhena śrapayitvā vivājināṃ kṛtvāpratāpe nidadhāti.*「次に，北向きに浄化具を通して乳を［器に］入れ，Āmikṣā のために［Gārhapatya 火の］上に置く。… 浄化具を通して，**熱された（*tapta-*）乳に酸乳を入れる。これが *Āmikṣā* として用いられる**（*bhavati*）。それ（āmikṣā-）を，**もし誰か巧みな者がいる場合には（*ya eva*）**，［その者が］周囲の炎により熱し水分を蒸発させ（*śrapayitvā*），Vājina から分離した（Vājina の無い）状態にして，熱くならない場所に保管する」（筆者訳 ≠ Nishimura n. 8 訳）。酸乳混入時には生乳の加熱（牛乳の沸点は約100.5度）が終了しているので, 西村2010 110f.「朝に搾った牛乳を熱しているときに dadhi を混ぜる（図：加熱中に添加）」，2011 1084 “dadhi is, however, added into śṛta when it is boiling” は正確でない。—— 同105「なぜ sāṃnāyya を用いない Cāturmāsya の brāhmaṇa に sāṃnāyya の神話が語られているのか」という疑問からは，Sāṃnāyya が，本来 Āmikṣā を含む「加熱生乳と酸乳との混入（*sam-nī*）から生じる食品全体」を指す上位概念であった可能性が示唆される。—— 同103「sāṃnāyya と Soma との同一視は, 以下の順に強まっていると考えられる：MS → KS → TB → ŚB」は，酸乳凝固のマントラとブラーフマナおよび Sāṃnāyya 献供のブラーフマナからの所見と相違する（→ 注24）。—— 同103「更に ŚB は … 月の満ち欠けを Soma の循環と連動させる新しい理論を展開させる。これは，神々が天界を祭火として献供した Soma が順次５つの祭火を巡って人間の誕生をもたらすという，後の五火説の先駆をなすものであっただろう」は五火説の誤解に基づいている。ŚB の五火説は，地上で人が献供する Agnihotra の **2 つの Āhuti** が循環する理論であり，Soma も神々も登場しない。JB では最初に神々が「不死（をもたらす飲み物：*amṛta-*）である**水たち**（*ap-* f.pl.）」を「**太陽**（*āditya-*）」に，BĀU/ChU では「**信**（*śraddhā́-*）」を「**あの世界**」に献供し，その結果，二次的に発生した「**Soma**」を，JB では「**雷**」に，BĀU/ChU では「**雨神**」に献供する（→ 注４）。月の朔望と Soma との関係は既に RV で確立している（→ 2.2.）。

祖霊祭では何らかの陶酔作用のある飲料の献供が推測される。

〈略号〉

RV R̥gveda — AV Atharvaveda — VS Vājasaneyi-Saṁhitā（-M Mādhyandina, -K Kāṇva）— MS Maitrāyaṇī Saṁhitā — KS Kaṭha-Saṁhitā — TS Taittirīya-Saṁhitā — TB Taittirīya-Brāhmaṇa — ŚB Śatapatha-Brāhmaṇa — JB Jaiminīya-Brāhmaṇa –– BĀU Br̥hadāraṇyaka-Upaniṣad –– ChU Chāndogya-Upaniṣad –– KauṣU Kauṣītaki-Upaniṣad — BaudhŚS Baudhāyana-Śrautasūtra — ĀpŚS Āpastamba-Śrauta¬sūtra — MānŚS Mānava-Śrautasūtra — VārŚS Vārāha-Śrautasūtra — KātyŚS Kātyāyana-Śrautasūtra — ^{m} mantra — ^{p} prose（“brāhmaṇa”）.

〈参考文献〉

阿部亮（, 他）2008. 新版『家畜飼育の基礎』. 農学基礎セミナー , 東京 .

天野恭子 2010.「Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1（Gonāmika 章冒頭）の研究」. 待兼山論叢44哲学篇 , 1 -17.

Caland, W. 1893. *Altindischer Ahnencult*. Leiden.

Caland, W. et Henri, V. 1906. *L’gniṣṭoma*. Paris.

後藤敏文 2007.「荷車と小屋住まい : ŚB *śālám as*」. 印度學佛教學研究55-2, 805–809.

—— 2008.「古代インドの祭式概観 — 形式・構成・原理 —」. 総合人間叢書第3巻, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」.

—— 2009.「『業と輪廻』—ヴェーダから仏教へ—」. 印度哲学仏教学24, 16–41.

Gotō, Toshifumi 2008. “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *śālam as* im Śatapatha-Brāhmaṇa”. *Indologica. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, Moscow. 115–125.

Witzel, Michael und Gotō, Toshifumi 2007. *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und Zweiter Liederkreis.* Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von M. W. und T. G. unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und

---

五火説の成立過程に関しては, cf. 筆者1994; 2000; 2001, 245ff.; 2015, 19–43（特に28, 41ff.）。

Mislav Ježić. Frankfurt am Main.（Gotō の担当部分を参照した。）
Witzel, Gotō und Scarlata, Salvatore 2013, *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Dritter bis fünfter Liederkreis.*（同上。）
Güntert, Hermann 1923. *Der arische Weltkönig und Heiland.* Halle.
Hoffmann, Karl 1975. *Aufsätze zur Indoiranistik* I. Herausgegeben von Johanna Narten. Wiesbaden.
—— 1976. *Aufsätze zur Indoiranistik* II.
—— 1960. "Der vedische Typus *menāmenam*". KZ 76, 242–248 = *Aufsätze zur Indoiranistik* I, 113–119.
Merkelbach, Reinhold 1984. *Mithras*. Königstein/Ts.
西村直子2006.『放牧と敷き草刈り』. 仙台 .
—— 2010.「ヴェーダ文献における発酵乳と Soma の神話 — sāṃnāyya を中心として」. 印度学宗教学会『論集』37,（141）–（157）.
Nishimura, Naoko 2011. "*āmíkṣā* and *payasyā*`: Processing of fermented milk in ancient India". 印度學佛教學研究59－３, 1084–1090.
尾園絢一2014.「印欧祖語 **ḱl-eh$_1$-i̯e/o-*」. 歴史言語学3, 3–20.
Raghu Vira 1943. "Gonāmika". *JVS* 1, ５–12 = *Vedic Studies*（New Delhi 1981）68–74.
Rau, Wilhelm 1957. *Staat und Gesellschaft im alten Indien*. Wiesbaden.
阪本（後藤）純子1994.「五火二道説の成立背景」. 第２回インド思想史学会（京都），配布資料 .
—— 1996.「iṣṭā-pūrtá-『祭式と布施の効力』と来世」.『インド思想と仏教文化』今西順吉教授還暦記念論集 , 882(67) －862(87). 東京 .
—— 2009.「古代インドの暦と『昴』（*kr̥ttikās*）」.『天空の神話—風と鳥と星』, 篠田知和基編 , 101–105. 名古屋 .
—— 2015.『生命エネルギー循環の思想—「輪廻と業」理論の起源と形成—』. RINDAS 伝統思想シリーズ24, 龍谷大学現代インド研究センター .
Sakamoto-Gotō, Junko 2000（1）. "Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* 'Die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten' in der vedischen Religion". *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*. Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 2. bis 5. Oktober 1977 in Erlangen, Wiesbaden. 475–490.

—— 2000 (2). "*kathā́ṃ-katham agnihotrā́ṃ juhutha* — Janakas Trickfrage in ŚB XI 6,2,1 —". *Anusantatyai*. Festschrift für Johanna Narten, MSS Beiheft 19.
—— 2001. "Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka". *Norm und Abweichung*. Akten des 27. Deutschen Orientalistentages. 157-167.
—— 2010. "The Vedic Calendar and the Rituals (1)". 印度學佛教學研究 58-3, 1117-1125.
—— 2011. "The Nakṣatra System in the Vedic Calendar". 印度學佛教學研究 59-3, 1075-1083.
Schwab, Julius 1886. *Das altindische Thieropfer*. Erlangen.

（本研究は平成28年度科学研究費「基盤研究 C」25370058の助成による研究成果の一部である）

〈キーワード〉新月祭，祖霊祭，Soma，R̥gveda, Atharvaveda，Sūryā，Aśvin, 牛殺し，嫁入，天文学，暦，*nákṣatra-*，*dádhi-*，*sāṃnāyyá-*，*āmíkṣā-*

〈宮城学院女子大学研究員，元大阪市立大学助教授，パリ第3大学第3課程博士〉

On the Prototype of the New Moon Sacrifice (and the ancestal worship)
— mainly based on Ṛgveda X 85 and Atharvaveda Ⅷ 10 —

Junko SAKAMOTO-GOTŌ

The New and Full Moon Sacrifices, which are performed periodically according to the moon's waxing and waning cycle, as well as the ancestral worship, are world-wide found and considered as one of the oldest religious ceremonies of the human beings. In the Vedic ritual system, the New and Full Moon Sacrifices (Darśa-Pūrṇamāsau) belong to the Iṣṭi, in which only vegetable food and dairy products are offered. The main oblation is usually Puroḍāśa, a kind of pan-cake. In a special variation of the New Moon Sacrifice, Sāṃnāyya "a mixture of sour and fresh milk" is offered to Indra (or Mahendra). In this case, Sāmnāyya is considered to be equivalent with Soma juice. Soma (juice of plant "ephedra") itself is, however, offered neither in the New and Full Moon Sacrifice, nor in the Pitṛmedha.

Ṛgveda X 85 is well-known as "the wedding hymn of Sūryā (Sun goddess) and King Soma (Moon god)." This marriage astronomically signifies nothing but the conjunction of the sun and moon, which causes disappearance of the moon in the sky. RV X 85,4 and 5 describe, in fact, the New Moon Sacrifice, in which Soma plant is squeezed and Soma juice is drunk by the gods.

In Ṛgveda X 14–16, on the other hand, we find scenes in which forefathers and Yama, sometimes with the gods, drink together Soma juice in the heavenly world or in ancestral ceremonies on earth.

The above mentioned hymns lead us to conjecture that Soma juice was offered in the New Moon Sacrifice as well as in the ancestral worship at the stage of Ṛgveda and the preceding Indo-Iranian period. It is assumed that the Soma offering disappeared in both rites, since the Soma plant became difficult to obtain in the course of advancing into the east India. With regard to the New Moon Sacrifice, Soma seems to have been first replaced by Sāṃnāyya, then by Puroḍāśa on behalf of the uniformity of the New and Full Moon Sacrifices.